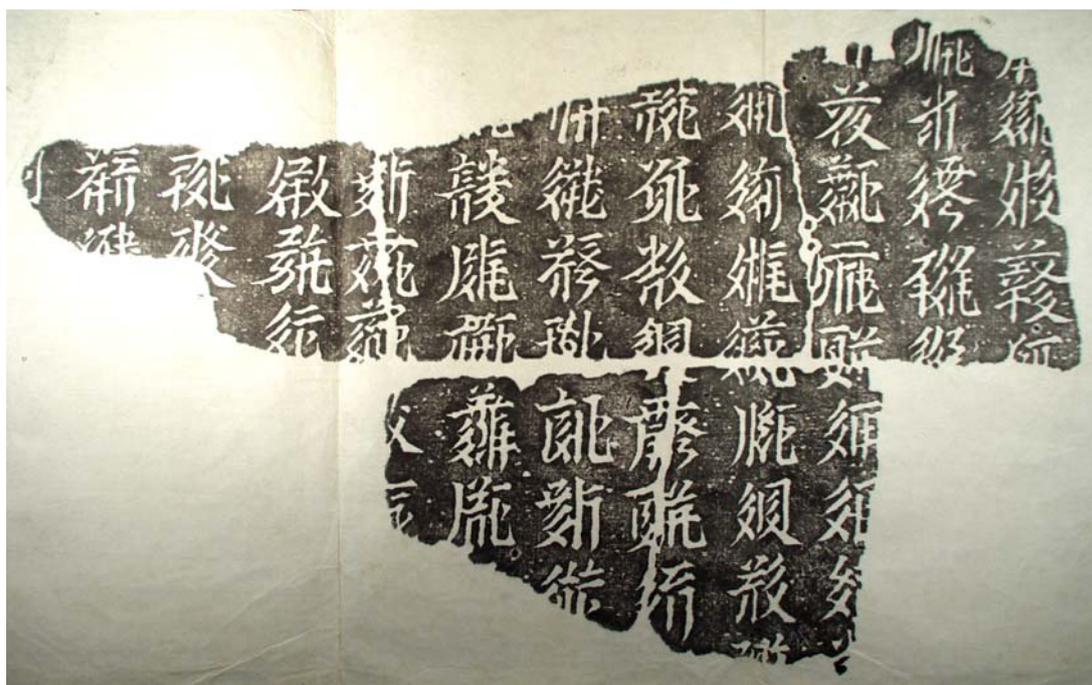


西夏陵墓出土残碑(M2X:3+20+160+533+876)について

吉池孝一

1. 複製本

古代文字資料館が所蔵する西夏文字残碑の拓本を紹介する。これは西夏の第7号陵から出土した残碑でM2X:3+20+160+533+876とされるものである<sup>1</sup>。この拓本には裏打ちがなされている。11行53字。大きさは縦30cm、横48cm。真正の拓本を見本として木に彫り写した所謂“複製本”である。しかしながら、この場合、贋作と称してよいのであろう。よくできているが、2節で紹介する実物の拓本と見比べるとそれぞれの文字のバランスが異なっていることを見て取ることができる。同様の複製本が複数作られたとみえて、日本の他の機関にも所蔵されている。



2. 4種の既刊資料

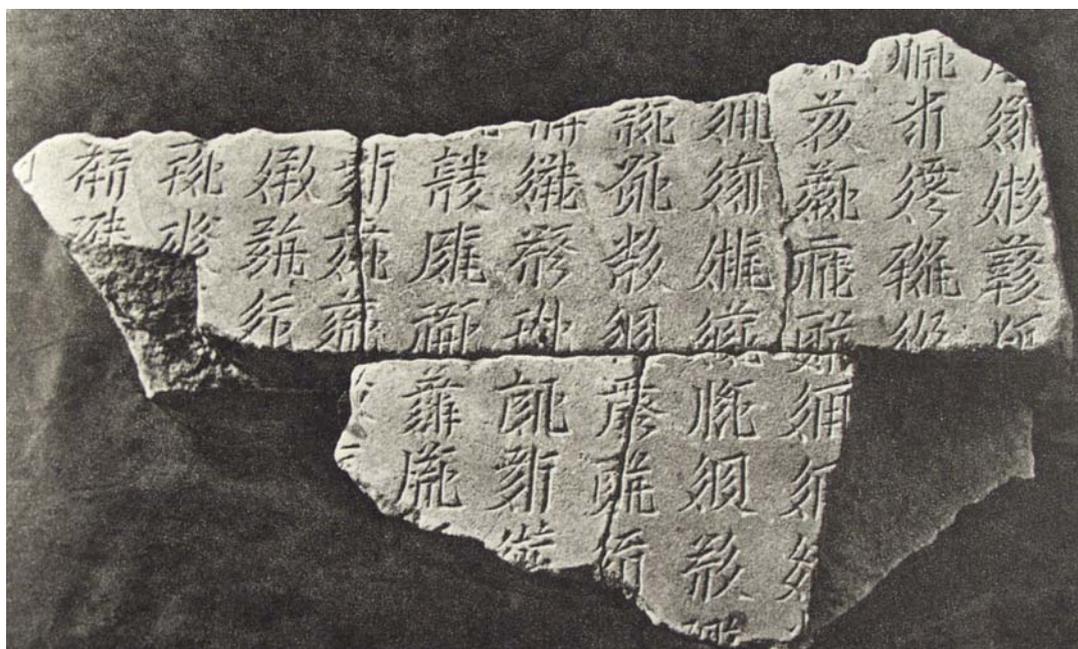
残碑 M2X:3+20+160+533+876 は次にあげる4種の文献により容易に見ることができる。李範文(1984)、これは拓本を収める。史金波・白濱・呉峰雲(1988)、写真を収める。許成・杜玉冰(1995)、拓本を収める。韓小忙・孫昌盛・陳悦新(2001)、写真を収める。この4種の

<sup>1</sup> 残碑の番号は李範文(1984)による。

資料を刊行年により並べるとつぎのとおりである。



李範文(1984)



史金波・白濱・吳峰雲(1988)



許成・杜玉冰(1995)



韓小忙・孫昌盛・陳悅新(2001)

4種の資料を見ると、原石の崩壊が次第に進んでいることを見て取ることができる。李範文(1984)拓本の右から5行目・7字目の下と、史金波・白濱・吳峰雲(1988)の写真の同一部分を見比べると、後者の一部分が崩れ落ちていることがわかる。なお、許成・杜玉冰(1995)

の拓本は、史金波・白濱・呉峰雲(1988)の写真にある原石に近いものに基づいた拓本である。李範文(1984)、史金波・白濱・呉峰雲(1988)、許成・杜玉冰(1995)の4行目・8字目と、韓小忙・孫昌盛・陳悦新(2001)の当該部分を見比べると、韓小忙・孫昌盛・陳悦新(2001)には8字目はなく、原石が崩れ落ちていることがわかる。

### 3.小結

李範文(1984)によると当該の残碑は1972年から1977年間に西夏陵墓から出土したものである。韓小忙・孫昌盛・陳悦新(2001)の写真の撮影日は明らかでないが仮に出版年からそれほど遠くない頃とするならば、16-17年ほどの間に原石の崩壊がある程度進んだということになる。採拓の際の作業が原石にダメージを与えたのかもしれない。このように原石の一部の崩落が進行しているわけであるが、上に紹介した4種の資料のうち、出版年がもっとも古い李範文(1984)に掲載された拓本が出土当時の状況を良く表した資料といえる。ちなみに、最初に紹介した復刻本は、李範文(1984)に近い系統の拓本に拠ったものである。

#### 【参考文献（発行年順）】

- 寧夏博物館発掘整理・李範文編釋(1984)『西夏陵墓出土残碑粹編』北京:文物出版社。  
寧夏文物考古研究所・許成・杜玉冰(1995)『西夏陵—中国田野考古報告』北京:東方出版。  
史金波・白濱・呉峰雲(1988)『西夏文物』北京:文物出版社。  
韓小忙・孫昌盛・陳悦新(2001)『西夏 美術史』北京:文物出版社。